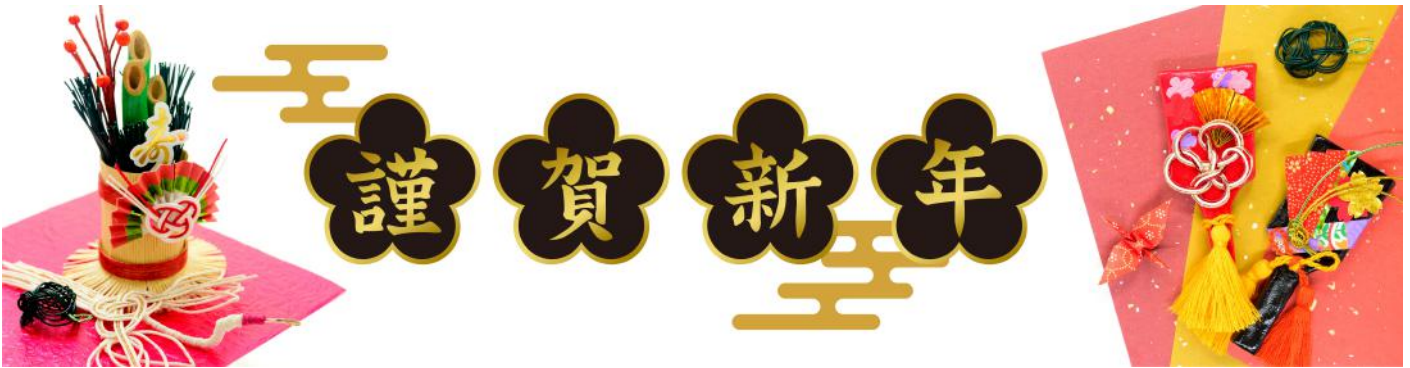


Network & Footwork

有限会社メディアハウスエイアンドエス Vol.39



コロナ禍になってテレビや新聞、ネットで感染者数などを表す折れ線グラフや棒グラフをよく見かけるようになりました。あの折れ線グラフや棒グラフは、いったいつ頃からあるのか、ご存じでしょうか。

古代エジプトや古代ローマでしょうか。それともルネサンス期。あるいは17世紀のニュートンの時代でしょうか。

◎グラフが誕生した時代

グラフが誕生したのは、もっとずっと後のことです。

折れ線グラフ、棒グラフ、そして円グラフは18世紀にひとりのイギリス人によって「発明」されました。

産業革命の進展に貢献する蒸気機関を改良したジェームズ・ワットの元で製図工をしていたこともあるウィリアム・プレイフェア（1759-1823）が、1786年に出版された、社会統計学の初の図表を使った書籍「商業および政治のアトラス」のなかで折れ線グラフと棒グラフを使って、1801年に出版された「統計簡要」で円グラフを使って経済データを表わしました。

背景には産業革命などで世の中が大きく変化し、社会の現況をデータで把握する必要に迫られたことがあります。

◎グラフで世界を変えた二人のイギリス人

イギリスには、もう一人、グラフによって社会に多大な貢献をした人がいます。近代看護を樹立したフローレンス・ナイチンゲール（1820-1910）です。彼女は医療改革のために統計学を活用し、グラフを使ったことでも歴史に名を残しています。

裕福なジェントリ（イギリスの下層地主層）の家に生まれた彼女は、クリミア戦争（1853-1856）が始まった一年後に、友人である陸軍大臣に看護団ととともに自らを戦地へ送ってくれるように懇願し、願いがかなって戦地に赴むいてまもなく、死者のほとんどは戦闘ではなくコレラや野戦病院の不十分な衛生状態が原因で亡くなっていることに気づきました。

彼女は、この事実衝撃を受け、帰国すると政府に対して兵士の食事や野戦病院の衛生状態を改良する活動を行います。

粘り強い要請の結果、衛生委員会が設立され改革が行われ、彼女はその改革が確かに効果があったという事実をグラフを使って広く知らしめます。

その結果、その後の戦争と平和における医療行為を永久に変えました。

◎春に刊行する新刊へ

こうしたグラフの歴史は、この春に刊行する本を書くために調べました。新しい本「学会スライド図解の技術 グラフと表の効果的な見せ方・作り方」（仮）では医学薬学を中心としたヘルスケア分野の事例を使ってグラフや図表の表現の仕方をまとめました。

グラフや図表を効果的に使い、さまざまな人が観察し、分析・評価した結果や、それに基づく考察を、より多くの人と共有することで、少しでも人々の生活がよくなればという思いでまとめました。今、デザインしてもらっているので、どのようなできあがりになるのか楽しみです。

飯田英明

コロナ禍で失われる会社や地域の歴史

●中小企業の社史「わたしたちの物語」

私に関わる中小企業の社史は、大企業や代々続く老舗の制作する社史とは、意味が大きく異なっています。

会社ができて年月が経ち成長するにつれて会社全体がひとつのプロジェクトのように動いた時代は遠くなって、組織単位で役割が与えられたり、活動の場所が複数の拠点で行われたりするようになり、一体感を持って、思いを共有化する単位が会社全体から組織単位へと移っていきます。

それとともに、創業者や創業者と一緒に働いた社員の方々が減っていき、創業期の行動・できごとやそこにあった気持ちを直接聞く機会は失われていきます。

そうしたときに中小企業の社史が意味を持ちます。現在の、そしてこれからの社員に「わたしたちのこの会社や組織は、どのように生まれて、どのようにできあがっていったのか」「わたしたちがやっているこの事業はどのように生まれて、どのように育って、今があるのか」を伝え、考えるきっかけを生み出し、会社の使命（ミッション）が、なぜそうあるのかを思い描かせる役割をします。

●発刊の3つのタイミング

こうした思いを持って携わってきた社史の制作ですが、その発刊には共通のタイミングがあります。

まず周年記念事業のタイミングです。創業30周年、50周年など記念事業の一環として発刊され、記念式典で配布されることもあります。

次いで経営者が交代するタイミングです。退任する経営者が中心となって制作する場合もあれば、事業を継承した新社長が、先代の歴史を記録で残しておきたいという場合もあります。

そしてもうひとつ見逃してはいけないタイミングがあります。創業者や経営者、そして一緒に仕事をした人たちの年齢によるタイミングです。多くの中小企業では、大企業のように過去の記録が充分残されているわけではありません。特に創業期の話はそこに関わった人から直接、聞き出してまとめるしかないことがたくさんあります。

しかし、ここに大きな問題が存在します。多くの中小企業が戦後の復興期から高度経済成長期に創業された

ことを考えると、いま聞き取りに取り組みないと会社の礎を気づいた時期に何があったのかはわからないままに、「私たちはどこから来たのか」は永遠の謎になってしまいます。

●コロナで失われる「私たちはどこから来たのか」

ところがコロナ禍になって以来、企業は規模の大小を問わず、まったく先が読むことができなくなり、いま起こっている状況になんとか対応することでせいっぱいになってしまいました。

この手探りで進まざるを得ないような状況はコロナ禍の影響がようやく底を打ったかに見えるものの、国際的な緊張状態や急激な円安といった新たな社会情勢の不安定な要因を考えると、この先も続きそうです。

こうした環境では、企業は過去を振り返る余裕を失います。その結果、多くの創業期の物語が語られることなく、失われていってまいます。コロナで多くのものが失われましたが、こうした中小企業の創業期の体験や記録も例外ではありません。

この事態に、微力ながらなんとかできないかと考えて、創業期やその後のオーラルヒストリー（関係者から直接話を聞き取り、記録としてまとめること）だけでも、さほど手間や時間、コストをかけずに残すことができないうかを考え続けています。

●微力ながらの試み

考えるきっかけとなるように昨年からはWebサービス「note」を利用して、20年あまりお手伝いしてきた社史制作で出会った経営者やその家族のこと、その体験を通じて私自身が感じたことを書き記し始めています。興味がありましたら、のぞいていただければ幸いです。

<https://note.com/akiyotakahashi>

高橋明紀代（日本ペンクラブ会員）

本年もよろしくお願いたします
有限会社メディアハウスエイアンドエス
〒108-0071
東京都港区白金台3丁目16番10-709号
PHONE (03) 3449-0785
FAX (03) 3449-0736
m-hmail@nifty.com
<http://www.m-h.co.jp/>